



弁当をつくる子ども食堂「かもめ」のメンバー

子ども食堂 学生も後押し

「かもめ」交流広がり50人分調理



今月上旬、子ども食堂「かもめ」の会場の宇品公民館に、赤いエプロンを身に着けた住民たち15人が集まった。キッチンに立つベテラン管理栄養士のそばには栄養教諭の免許取得を目指す大学生の姿も。「春らしくちらしずしやイチゴで」「肉じゃがのジャガイモは1人

2切れね」。50人分の弁当を手際よく作った。

子ども食堂は2018年8月から月1回開く。管理栄養士の資格を持つ門岡子さん(15)を中心に野菜を多く取れるメニューを考えている。食材はスーパーや八百屋からの寄付を受けた

り、自ら栽培した野菜を持ち寄り、自給自足を心がけている。新型コロナウイルスの影響で現在は弁当を配っている。食堂は子どもと保護者だけでなく誰でも参加できる。当初は30人程度の参加だったが、口コミで広がり、多い時で50人ほどが集まる

交流の場となった。昨年10月、近くの県立広島大に通い栄養教諭の免許取得を目指す大学生4人が加わった。偶然、町の掲示板で子ども食堂のチラシを見て申し込んだ。4年瀬尾菜月さん(21)は「大量調理のスピードや味付けのこつを学べ

る」と実感する。「学生さんからパワーをもらえろ」と子ども食堂の長谷久美子代表。子どもたちと住民が触れ合う場として「新型コロナ前のように食べながらいろんな話ができて、帰ってきてほしい」と願う。(下高充生)

め、頼ってもらえる事業にしたい」と意気込んでいる。(下高充生)

住宅街に山積みの米袋 NPOフードバンク拠点



倉庫にコメを並べる 倉庫さん

は笑う。昨年、子ども食堂かもめから食材集めや保管について相談を受け、自宅の駐車場内に平屋の倉庫を建てた。政府や広島市から備蓄米やビスケットを譲り受けて保管している。

今後は生鮮品を扱ったり、焼き芋を焼く機械を導入したりしたいという。食材の提供を希望する団体と協議会をつくり、需要と供給がうまく回る仕組みづくりも考えている。中原さん

は「困っているが声を上げにくい人もいます。活動の幅を広げて認知度を高

宇品海岸に近い住宅街の一角にある倉庫に10tの米袋が山積みになっていた。南区に本部を置くNPO法人環境保全創生委員会のフードバンク事業の拠点だ。

清掃など街の美化に加え、昨秋から地域の子育て活動や食費に悩む家庭に主食のコメを届け始めた。「とても喜ばれるよ」と理事長の中原健治さん(82)